

「誰も真相を知らないままに…」 原発事故、自己批判と懺悔の書



「事故原因の
究明が不可
欠」と村上氏

超党派国会議員による「原

発対策国民会議」の会議録、

原子力の専門家らの証言を採

録した『福島原発の真実 こ

のままでは永遠に収束しな

い。』（東信堂）が3月11日に

刊行された。著者は同会議を

主宰した自民党衆院議員で衆

院政治倫理審査会会長の村上

誠一郎氏（60）である。

「国民会議は第1回会合（2

011年4月20日）で、事故

後わずか数時間でメルトダウ

ン（核燃料の溶融）が起きた

こと、政府と東電による稚拙

な初期対応が失敗に終わるこ

となどを警告した。同時に早

期収束のための冷温密封、い

わゆる『石棺化』も提案した

が政府は耳を貸さず、国家と

国民に重大な損害を与え、2

年が過ぎた今も事故原因さえ

究明できていない」

同書には、国会での質疑の

ほか、国民会議で講師を務め

た原子力業界の関係者らの全

証言が掲載されている。

採録されたのは、衆院決算

行政監視委員会で参考人とし

てメルトダウンとメルトスル

ー（容器外漏出）の可能性を

証言した原子力コンサルタン

トの佐藤暁氏をはじめ、元日

本原子力研究所安全性研究セ

ンター長の石川迪夫氏、元原

子力安全委員会委員長の松浦

祥次郎氏、東大アイソトープ

総合センター長の児玉龍彦氏

ら。「私は原子力のA級戦犯。

知っていることは何でもお話

しする」と証言した「原子力

ムラ」の重鎮も含まれており、

関係者による自己批判と懺悔

の書とも言える。

「今後のエネルギー政策を決

めるためにも、事故原因の究

明を怠つてはいけない。政府、東電、国会、民間の四つの事故調査委員会による報告書はどれも不十分。このままでは誰も真相を知らされないことになりかねません」（村上氏）

村上氏は党の資源・エネルギー戦略調査会で事故調の責任者を聴取し、改めて事故原因と政治責任の明確化を追及する考え。事故は収束していないのだ。（徳丸威一郎）